

Title	徴兵の社会史的考察
Author(s)	喜多村, 理子
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49108
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	喜多村 理子
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 21672 号
学位授与年月日	平成 20 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化形態論専攻
学位論文名	徴兵の社会史的考察
論文審査委員	(主査) 教授 川村 邦光 (副査) 教授 杉原 達 准教授 富山 一郎

論文内容の要旨

本論文の序章では、先行研究を踏まえて、問題意識と方法が提示されている。民衆は何を心の軸として戦争を受け止め、ナショナリズムの道歩んだのかという問題意識のもとで、1873 年(明治 6)の徴兵令布告から日中全面戦争開始までの間、徴兵がどのように受け容れられてきたのかに関して、おもに山陰地方の農村部の青年を対象にして、身体と信仰に焦点を合わせて考察することが課題として設定されている。

第 1 章では、徴兵令が布告され、西日本を中心に多くの血税騒動が起こるが、外部の異人を排除していく心性、新政府の政策への不満や生活困窮による抑圧感とともに、ソウゴト(地域の共同労働)の慣行によって蜂起の土壌が培われていたことが論じられる。

第 2 章では、徴兵制に対して、民間では合法的な徴兵忌避の方法が模索される一方で、徴兵忌避の風潮に対して、兵役者を優待する組織が結成され、軍隊での兵役中の服務評価が地域社会での男性の価値を決定することになったことが指摘されている。

第 3 章では、島根県を事例として、日清戦争期の地域社会において、熱狂的な戦争支援へといたる過程が分析される。新聞や雑誌、特に幻灯をメディアとして戦意・敵愾心が高揚され、当事者意識を欠いたまま「戦争物語」に浸っていたとともに、社寺での祈願が単純に出征兵士の戦勝・武運長久祈願とはいえ、地元出身兵士の安全祈願・弾除け祈願、また徴兵除け祈願であったことが論じられている。

第 4 章では、行政側では旧来の若者組を行政の末端組織とし、農業に従事し励む青年会へと再組織化していくが、護憲・普選運動や小作争議が広まり、農村青年のなかには農民運動や政治運動を行う者も現れる一方で、青年訓練所が設置され、国体観念の教化が行われ、教練が課されて、軍隊に不可欠な身体性を身につけていったことが指摘されている。

第 5 章では、徴兵検査において身長を重視した身体基準が男性の身体能力の基準とみなされる言説が生み出され広まっていく中で、青年たちの身体には好奇の眼ざしが注がれるとともに、甲種合格=男の価値として社会に定着していったことが指摘されている。

第 6 章では、詐病などによる徴兵忌避や徴兵検査会場での軍人と官民との軋轢があった一方で、兵士の入営・除隊での歓送迎が派手に盛大に行われ、慣行化していったことが指摘される。この盛行は国民の兵役意識の高まりではなく、贈答と饗応の民俗社会における労苦の別世界である軍隊からの無事帰還の祈願・感謝であったと論じられている。

第7章では、徴兵検査や徴兵抽選の前また当日に、多くの寺社を参詣し、神仏に祈願する習俗が生まれ盛んになったが、その祈願の内容は個人の日記や村の日記には記されていないとはいえ、それは徴兵合格ではなく、徴兵除け祈願であり、合格すれば武運長久祈願へと変化していったことが、兵役体験者の聞き取りや新聞記事から分析されている。

終章では、鳥取県の社会主義的思想を抱いた農村青年が満州事変で戦闘を体験して帰還した後、軍隊や戦場との繋がりを求めて、在郷軍人として真面目に活動していくプロセスが描かれ、また武運長久の祈願や千人針・御守・赤布などの習俗の多義性が指摘される。

論文審査の結果の要旨

本論文では、徴兵制が日本社会の中に定着していく歴史的なプロセスを特に島根・鳥取両県の農村を中心として分析するとともに、農村青年が徴兵に直面しながら兵士としての身体を構築し、また地域社会において徴兵の対象となった青年や家族、その地域住民が徴兵検査や徴兵に対応していった動向に関して、フィールドワークによる聞き書きをはじめとし、諸種の資料を渉猟して収集し、社会史のおよび歴史民俗学的な視点に基づいて、きわめて詳細に分析して考察し、すぐれて意欲的な論文となっている。

本論文では、まず第1に、地域の行政文書や小作争議や農民組合運動に直接参加した個人の日記、青年団手帳・青年訓練手帳を発掘して、また本人に聞き取り調査をして、農民組合や農民運動への参加の実態、青年や地域住民たちが宮籠り・神仏参拝をして徴兵除けの祈願を頻繁にしていた実態、小作争議が厳しく弾圧される時代になり、運動競技が青年たちの感情やエネルギーの受け皿になっていった実態も明らかにされ、ミクロな個人史からマクロな社会史が重層的に鮮やかに描かれている。これまで青年の学校教練（軍事訓練）に関しては旧制中学校卒以上の学生が研究対象となっていたが、ここでは歴史学の対象としてあまり取り上げられることのなかった、青年の大多数を占めていた高等小学校卒業生など、特に山陰地方の農村青年に焦点を絞り、地域社会におけるその動向を詳しく論じていることも大きな特徴となっている。

第2に、徴兵制度の研究において、これまで徴兵検査に着目した研究はあまりなく、陸軍が軍隊の美観または威容を示すために、身長を重視した身体基準に固執し、それが男性の身体能力の基準とみなされる言説が生み出され広まっていく中で、青年たちの身体に好奇の眼ざしが注がれるとともに、甲種合格＝男の価値として社会に定着していったこと、また甲種合格を望む一方で、徴兵を嫌い、籤逃れを幸運とする意識が現れ、青年たちの心に葛藤を生じさせたといったことが明らかにされている点は評価できる。

第3に、徴兵検査の前や当日、家族や村の人々、青年会の先輩・後輩たちの親密な関係の中で、宮籠りや山籠りをしたり、神社仏閣に参詣・祈願したりした、民衆の神仏信仰の濃密な世界が、病氣平癒の神仏と徴兵＝厄とする厄除け祈願の神仏とを対応させ、民衆の信仰意識を掘り下げて、緻密に描かれている点は、大いに評価することができる。

本論文では、徴兵に関して、多種多様な資料を用いて分析されているが、兵役を終えて除隊した後に青年たちが地域社会などでたどった経歴に関して、さらに調査し考察することが必要である。徴兵検査における身長に関する考察はすぐれたものであるが、結核や花柳病、トラホームなどの疾病についても論じ、また短身の悩みに対する伸長の書物や伸長器械の雑誌広告も多くあり、社会的に身長を重視する言説を幅広く考察するならば、社会史的研究として広がりもったと考えられる。だが、こうした残された課題はもとより本論文の意義を損なうものではなく、今後の研究を深化させていく課題と考えられるべきものである。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものであると認定する。